

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03432

研究課題名(和文)大規模字幕コーパスを利用したCan-doリスト対応型eラーニング教材の研究

研究課題名(英文) Research on e-learning materials corresponding to can-do lists using a large subtitle corpus

研究代表者

藤村 知子 (Fujimura, Tomoko)

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授

研究者番号：20229040

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,800,000円

研究成果の概要(和文)：初級から中級にかけて日本語を効率よく習得するには、文型積み上げ式のシラバスを生かしつつ、Can-do記述文を学習者にわかりやすく提示することにより、学習目標を明確化し、学習者自身が日本語でできること、できないことを自覚して自律的な日本語学習に結びつけることが肝要である。それを中国人学習者向けの教材『実力日本語』で実現させた。

JPLANGは、教材コンテンツの配信のほか、LMSを利用して課題の配信・受信も行えるため、コロナ禍において、オンデマンド教材として活用することができた。その中で反転授業のコンテンツや文型辞典の役割が見い出され、それに利用できる中級文型の解説動画の試作も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

eラーニング教材JPLANGは、初級から中級の学習に必要な語彙・文法解説(初級は15カ国語で提供)、読解・聴解教材、産出のための文型練習、会話練習教材をすべて無料でWeb公開している。特に中級文型動画解説は、「文型辞典」の役割を果たす可能性があり、また、日本語を聞いて、日本語で考えることができる教材ともなっており、特に海外の日本語学習者にとって日本語理解を深められるものである。

研究成果の概要(英文)：In order for students to learn Japanese efficiently from beginner to intermediate level, it is essential to clarify learning goals by presenting can-do statements in an easy-to-understand manner, while utilizing a syllabus that builds on sentence patterns. This is the key to autonomous Japanese language learning. This was realized in the "Jitsuryoku Nihongo" textbook for Chinese learners.

JPLANG could be used as an on-demand teaching material at Corona Disaster because, in addition to the distribution of teaching material contents, it can also distribute and receive assignments using an LMS. In the process, the roles of flipped classroom contents and sentence pattern dictionaries were identified, and a prototype video explaining intermediate sentence patterns was created.

研究分野：日本語教育

キーワード：eラーニング Can-do記述文 日本語教育(初級) 日本語教育(中級)

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2001年に発表された「言語のためのヨーロッパ共通参照枠(CEFR)」のインパクトは大きく、日本語教育においても、スタンダードやCan-doリストの作成がさまざまな機関で行われ、本学においても留学生日本語教育センターで「JLPTUFS アカデミック日本語 Can-do リスト」が作成され、それに基づく教材開発も行われた。

2. 研究の目的

本研究において2003年より開発、2004年より公開してきたeラーニング教材JPLANGは、初級、中級の4技能を伸ばす教材が用意され、特に初学者のために初級の文法コンテンツは15言語による解説がなされているほか、JPLANGのほとんどのページを利用した学習者は、文法の誤りのないわかりやすい日本語が産出できることが確かめられている。しかしながら、文型積み上げ式に基づいて作られたため、最終的な学習目標はあるものの、課ごとの学習目標が明示されておらず、学習意欲の継続が難しいことは否めない。そこで、Can-do記述文を教材に反映させる研究を行うこととした。

3. 研究の方法

まずはJPLANGと同様に文型積み上げ式で作成された『実力日本語』を用いて、Can-do記述文を教材に反映させる研究を行った。『実力日本語』は、日本の大学院に留学する中国人留学生向けに1990年代に本学で作成された日本語教材であるが、日本語の文構造を正確に習得することに焦点が当たっており、その文型を習得すると、日本語で何が表現できるようになるのか、学習者にはわかりづらい面があった。初級文型を組み合わせるとモデル会話を作り、その会話を通じてどんな場面でどんなことが日本語で言えるようになるのか、Can-do記述文との照合を行った。自己紹介、1日の行動、持ち物、買い物、家族といった身近なことから、実験室でのマナー、日本と中国との比較、生活習慣の相違の説明など抽象的な内容についても、使用する語に十分配慮すれば初級文型を使って表現できることがわかった。目標とした文型の理解だけでなく、スムーズな発話につながるためには、その文型と既習の語彙とを組み合わせることで学習者自らが文を作り、発話するという練習が必要である。それを行うための例文の見直しを行い、目標としたCan-doを達成し、スムーズな発話、応用力の伸びにつながるようにした。課ごとに設定したCan-doが達成できたかどうか、学習者が確認できるような問題も作成した。

4. 研究成果

文型積み上げ式の教材にCan-do記述文を組み込むことにより、学習者にもどんな場面で使える文型なのか、自分の考えや意図を表現したい場合に、どんな文型を使用すればいいのかということ意識させるのに役に立った。日本語で言えるようになったこと、逆に日本語でまだ十分に表現できないことを、Can-doリストをチェックすることにより、日本留学という目標を持つ学習者に、学習者の次の短期的な目標を明確に示すことができ、自律学習への可能性を開いた。

JPLANGには日本語音声認識を組み込まれており、スピーキングテストにおいてユーザーが録音した回答の採点の効率化を図った。効率化の観点は、a発音に問題があれば、音声認識において正しくテキストが表示されない、b表示されたテキストがあれば文法の誤りを見つけやすい、ということであったが、日本国内の初級レベルの日本語学習者を対象とした場合、aについては、学習者の名前などの固有名詞以外はほぼ正しくテキストに変換され、発音の良し悪しの評価には使えなかった。教師にとっては、「何を、いつ、どこで、どのように」といった問いに対するスピーキングテストにおいて、学習者の回答が音声とともにテキストで表示されるため採点の効率化が図られた。

JPLANGはスマートフォン(Android, iOS)に対応しているが、開発当初はパソコンでの使用を前提としており、学生のパソコン所有率が低い開発途上国においては、教材不足を訴えながらも、正規授業でのJPLANGの使用に難色を示す教育機関もあった。しかし、最近では、大学で日本語を学習している学生であれば、スマートフォンの所持率は高く、正規の授業で使用しても所持・不所持による不公平はほとんどないと考えられた。そこで、カンボジアにおいて、課題提出の機能に絞ってパイロット調査を行った。スマートフォンでは日本語入力は難しいため、音声による回答の送信であったが、学習者はLINEなどSNSと親和性が高く、操作に手間取ることはなかった。回答の送信機能だけでなく、学習者の発音矯正につながる、自身の日本語の発音を聞く機能について、ユーザーに周知することが望ましい。

コロナ禍におけるオンライン授業では、世界に散在する学生には時差の問題があるため、JPLANGをオンデマンド教材として活用した。また、理解度確認のため、JPLANGのLMSを利用して課題の配信とフィードバックを行ったが、正確さが要求される予備教育においては、対面授業と同等の理解度を得ることは難しいことがわかった。JPLANGは、反転学習の教材と位置付けられる。

中級文型の解説動画を試作し、クラス登録をしたユーザーがJPLANGにアクセスすれば、視聴できるようにした。海外の日本語教育機関では、日本語母語話者教師が在籍しない機関もあるた

め、文法授業は、それぞれの母語によって行われることが多い。そのような学習環境にある日本語学習者にとって、直接法による文法解説動画は、日本語母語話者による日本語の授業が体験できるほか、海外学習者の弱点である日本語の聞き取りの練習の機会を提供することにもなる。

JPLANG は、約 20 年前の開発当初から役割が変化し、現在では、基本練習の付いた文型辞典としての役割を追求する段階になったと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 藤森弘子	4. 巻 45
2. 論文標題 口頭表現対話にみられる初級・中級学習者のやりとりの考察 アカデミック日本語Can-doリストの指標と関連して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集	6. 最初と最後の頁 95-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 前田真紀・藤森弘子	4. 巻 25巻1号
2. 論文標題 初級教室活動におけるイラストの活用 スライド教材化の効果について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語教育方法研究会誌	6. 最初と最後の頁 72-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤村知子	4. 巻 1
2. 論文標題 日本語教育とeラーニング	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 国際日本研究 対話、交流、ダイナミクス	6. 最初と最後の頁 87-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 佐野洋
2. 発表標題 モノの捉え方と動きの表現
3. 学会等名 電子情報通信学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kohji Shibano
2. 発表標題 Analyzing formulaic sequences in spoken Japanese from a large Japanese TV closed caption corpus
3. 学会等名 The 18th World Congress of Applied Linguistics (AILA 2017) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 XIAO Tingting, Kohji Shibano
2. 発表標題 Developing Intimacy by Style-shifting in Japanese: A TV Subtitle Corpus-based Study
3. 学会等名 The 2017 conference of the American Association for Applied Linguistics (AAAL 2017) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐野洋
2. 発表標題 雨量予報，降水確率とモダリティ
3. 学会等名 思考と言語研究会研究技法，電子情報通信学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐野洋、石田智裕
2. 発表標題 時間経過認識の二重性と文法
3. 学会等名 思考と言語研究会研究技法，電子情報通信学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐野洋
2. 発表標題 事態把握の違いを利用した語学教材の提案(2)
3. 学会等名 情報処理学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Hajime Mochizuki
2. 発表標題 Development of a Closed Caption TV Corpus Retrieval System for Language Learning
3. 学会等名 8th International Conference on Education Technology and Computers (ICETC 2016)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 猪野真理枝、佐野洋	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京外国語大学出版会	5. 総ページ数 312
3. 書名 英作文なんかこわくない パラグラフ編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>eラーニング教材JPLANG http://jplang.tufs.ac.jp 東京外国語大学留学生日本語教育センター（藤村知子、田山のり子、山田しげみ）・中国赴日本国留学生予備学校. 実力日本語. 中国赴日本国留学生予備学校内部印刷. 2017</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	芝野 耕司 (Shibano Kohji) (50216024)	東京外国語大学・その他部局等・名誉教授 (12603)	
研究分担者	佐野 洋 (Sano Hiroshi) (30282776)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	望月 源 (Mochizuki Hajime) (70313707)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	
研究分担者	藤森 弘子 (Fujimori Hiroko) (50282778)	東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授 (12603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関